



TITLE:

静脩 Vol. 7 No. 3 (1970.9) [全文]

AUTHOR(S):

---

CITATION:

静脩 Vol. 7 No. 3 (1970.9) [全文]. 静脩 1970, 7(3)

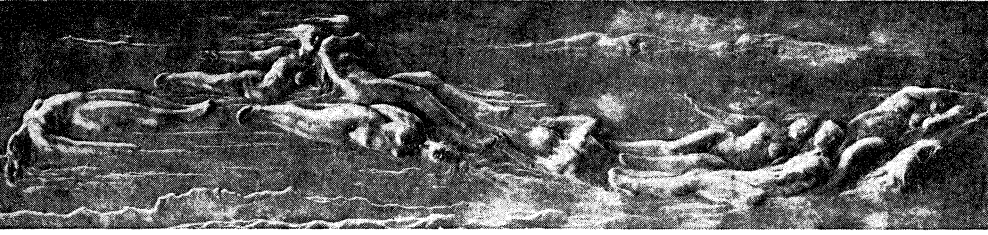
ISSUE DATE:

1970-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65938>

RIGHT:



## 大学改革にさいし図書館にのぞむ

——“利用者の声”特集号（その一）——

### はじめに

奉仕機関である図書館は、つねに“利用者の声”をきく姿勢が必要ですが、このことは現在とくに大切であると思われます。附属図書館事務部から全学のライブラリ・システムについての試案が出されている折柄“利用者の声”の特集をいたしました。

本号に寄せられた利用者各位のご意見にはふかく耳を傾け、今後図書館の改革を考えていくときの参考にさせていただきたいと存じます。

薬学部 教授 犬伏康夫

“大学改革に際し図書館にのぞむ”というテーマで利用者の声をということなので思いついたことを二、三記します。図書館の改善あるいは改革を考える場合、1) その意図と目的 2) それを実現するための機構 3) その結果はどうなったか、特に利用者にとって便利になったかどうかを含めての検討という過程をへることになるだろう。

ところで利用者は特別の人を除いてその関心は 3) に向けられるであろう。2) については余り関心はなく、たとえあってもなかなかそこまで考える時間的余裕をもたないというのが実情で、また当然のことかもしれない。こういった点から案が利用者の立場をどのように理解し、考慮に入れているかがもっとも重要な点であろう。

図書の利用は大きく分けて文献の入手と文献の検索ということになるが、第一の文献の入手については京大という単位で考えてもなお問題が残されている。学内相互利用ということで原則としてどこにあっても利用できるが、そのためには利用者がいちいち借用書をもってゆかなければならない、あるいは複写の設備はどこにもあるのに機構上の問題で借り出した上で自分の学部でコピーしなければならないとか、図書館全体の問題からすると小さな問題かもしれないが利用者にとっては身近かなところに問題がある。

第二の文献の検索は、学内的な所在調査ということでは問題はないが、将来を考えると多くの問題があろう。たとえば現在のように情報が増加してくると、とても手では探しきれないという事態が目前に迫っていることは確かであろう。こうなると文献の探索にもコンピューターの導入が必至になるだろう。したがって、こうなると必然的に今までなかったような全学的な図書館組織が要求されると思われるが、このような事態にどのように対処してゆくか考慮されるべきであろう。利用者にしてみれば日常の図書業務の機械化もさることながら、本来の文献探索のための機械化がどのように図書館組織に影響を与え、どのように機械

化されるかにもっとも大きな関心をもつものである。

はじめに記したように改善、改革を考える場合の 1) → 2) → 3) の方向への過程と、一方利用者の 3) → 2) の方向への過程がうまくみ合い、利用者のもっている細かい問題、あるいは近い将来当面するであろう問題の解決に案がどうとりくむかにもっとも注目する。ライブラリー・システムとごく日常的な小さな実質的な問題のひとつひとつの結びつきとそれがどのように解決されるかの検討がこれからの大きな問題ではなかろうか。

#### 工学部 教授 金 多 潔

大学の改革は、いろいろな問題について、あらゆる角度から慎重な検討が加えられつつあって、やがて新しい具体的な形に落ち着くことであろう。その結果が漸定的に、あるいはまた最終的にどのような姿になって現われてくるかということは筆者には予測もつかないけれども、問題を図書館のみにしぼって見てもそこには沢山の課題が山積して行くように思われる。

自然科学、社会科学、人文科学のどの分野がとくに多いかは明らかではないが、わが京大図書館に1年間に受け入れられる蔵書だけでも10万冊を超え、その比率が年々高まって行く傾向にあるのであって、このままで過せば遠からずして、いやすでに、書庫のスペースは一杯に満たされてしまうことは自明である。

その傾向は本部図書館の分室ともいうべき私どもの教室図書館においてはより深刻なものとなっている。当初は研究室とか教官室にする心算で建設された教室の一角が書庫に使われ、蔵書で満たされて、段々とスペースを膨張させざるを得なくなっている。このために教室ではもともと狭い教室の各種スペースをやりくりしている訳であるが、いつも漸定的であって、恒久的な名案は見付かってはいない。

古い本は古きがゆえに、また一般に得難いがゆえに簡単に処分してしまう訳にはゆかない。反面、最新の知識を盛り込んだ新刊書は多くの研究者・学生から強い要望のあるところである。これらを保持し管理する図書館はただ今までと同様な形で膨張し続けなければならないものだろうか？ 情報過多といって片づけてしまわないで、この単調な膨張を何とか防ぐ方法・手段を大学改革に伴う技術的な問題の一つとして多くの人々に考えてもらいたいものである。

別の話になるが、教室の図書室の利用者の中には図書室の利用規定や貸出規定を守らないで迷惑をかけているものも少なくない。期限内に返却すべき本を長期にわたって借りたまま、図書室係員からの督促にも応じないものもあると聞く。このようなモラルの低さではとても大学改革どころの次元ではなく、図書館に何かを望む以前に先ずわれわれ利用者の衿も正さなくてはならないと思うのである。

#### 医学部 4回生 中 尾 紀 子

医学部では図書館の本はだれでも同じように利用できるもので、医学部の図書館を利用する手続きに不便を感じたことはありません。しかし、教科書類がどんどん古くなっていくためか、本の冊数ほど内容は揃っていないと思います。また内科、外科など各科の間で充実度にむらがあるのではないかと感じています。各科の専門書は各教室の図書室の方が充実しており、また個人の蔵書が充実しているという友達もあります。私も含めて、図書館の意義を認識する必要があると思います。

図書館が利用しにくい理由として、医学部図書館は9時から5時まで開館していますが、

授業や実習が遅くまである時は読書の場合としての図書館は利用できないわけですし、一般教養図書のある中央図書館の本は読めないわけです。もう一つの理由としては、読書をする場におけるマナーが確立されていないため、足音が騒がしかったり、学生の休憩室と利用される傾向があって騒然とした雰囲気になることもあるためだと思います。

プリンストン大学にいたことのある生物学者によると、日本研究用の本だそうです、山岡荘八の「徳川家康」をその図書館から借りて読んだそうです。そこには中央公論、文芸春秋、週刊朝日、朝日ジャーナルまで揃っていたし、日曜日でも開館していたということです。

#### 教養部 助手 川合 葉子

京都大学の総合的なライブラリーシステムというものがいま検討されているらしい。私達の生活にいろいろな影響がある事柄だけに、どういう内容なのか、具体的にはどういう影響があらわれてくるのか気がかりになる。「改革」ということは、主体となる人がどれほど善意を持って努力されても、まわりの事情とからみあって奇妙な効果をひきおこす危険性を持っている。中教審の答申でさえ「改革」という言葉が使われる世の中だから、何のために、何が変わるのかということに皆が神経質になっている。検討されている事柄をわかりやすく関係のある人々に知らせ、充分に意見が述べられる機会を設けて、慎重に検討してほしいと思う。「静脩」を読んでも、私達の知りたいことまでは書かれてないので、いろいろな疑問がかえって増えてくる。

利用者にとっては、開放的で利用しやすいシステムに変わるならば喜ばしいことである。コンピューターが導入されると、受入れの時日が短縮されたり、情報網が今までより整ったり、ある程度の利益を受けることになるのかなと思う。しかし機械を導入したからといって人のしなければならぬ作業量は減るとは限らない。むしろそのために新しい機能、新しい職務内容が生まれ、導入しただけの効果を挙げようと思えば、まわりの人々の作業量が増えるのが経験的な常識である。そのことを充分見通して職員定数についての計画も、もりこまれていると、やがてそのしわ寄せが利用者にはびいて来るのではないかと心配になる。

利用者の声を「改革」に際して特集されることは大変結構なことだと思う。ただ特集してから利用者の声は聞いたのだということになっては困る。もっと日常的に利用者の声が図書館行政に反映するようになってほしいと私は常々思っている。ふつう、私達の要望や疑問や不満はどういう形で図書館側に伝わるのだろうか。一番日常的には投書でもこのような寄稿でもなく、受入れや閲覧の業務をしている職員の人に折にふれて言うということが多い。私はいろいろな学部や教室の図書を利用させてもらった経験があるが、図書関係の職員の人々の仕事に対する熱心さに驚くことがよくある。学生の人達に教育的な助言ができるように勉強をしたり、教員や研究員の人達と図書委員会を構成していて、利用の実態や図書業務の専門的な見地からの意見を発言して、運営にいろいろ寄与をしておられる。でも多くの図書館では、職員の積極性を十分に引きだす機構になっていないように思う。今度の改革でも末端の職員はつんぼさじきにおかれてはいないのだろうか。そうしておいて有能な職員がいないなどとは言うべきではないと思う。労働条件がととのい、職員の発言が尊重され、自信を持って働ける図書館では、私達も親切にいろいろ教えてもらえて、利用しやすい図書館になるのではないだろうか。

#### 法学部 助手 広渡 清吾

文は人なりというが、また図書館は大学なりであろう。京大法学部は東大法学部に比して

仏文献が少ないため、仏法学者が育たないという臆見さへある。

私にとって図書館は、しばしば「欲しい本が手に入らず」「借りたい本がすぐに借りられない」という仕方がかかりあう。問題はもちろん簡単ではない。ただ多くは「金の問題」であるように思われる。図書費を増額すること。職員を増やすこと。金なくして改革なしである。金なしに改革しようとすれば、無理が生ずる。コンピューターが入る代わりに、人を減らす(実質の意味も含めて)という問題もおこりかねない。これでは「コンピュータピア」どころか、20世紀のラッダイトとなる。これは心しなければならない。

情報化時代と称して、近年、情報処理の近代化のため図書館業務の機械化の問題がやかましい。だが私は、先ず図書館業務がもっと生き生きとしたものであることを望む。本来研究教育機能の重要な補助的役割をはたすべき図書館業務が、単なる物品管理業となっている。図書館職員は、かびくさい本を相手にひとりごとをいう他ない。図書館職員は、私達研究者にとっても、また、それらに対して図書館がもっと解放されねばならないところの学生にとっても、よき adviser でなければならない。「カントの邦訳をどの項目に分類すべきかを知らないライブラリアンのいること」(静脩 Vol. 7, No. 2 参照)は、確かに問題なのである。しかしそれは、このライブラリアンの心がけの問題ではすまされない。そのための研修や、職員としての資質向上、職場改善の研究会などを組織しえない、そしてその意欲をおこさせない図書館行政や勤務条件にこそ問題があろう。

図書館の改革は利用者である私達と同様に、現場の職員の意思を尊重して行なわれることが必要なのではないか。「ライブラリアン」の地位を私達の協力者として確定し、それにふさわしい待遇を与えること。このことによって利用者の受ける恩恵はかなりのものがあるであろう。図書館職員と研究者の協同関係の確立、これが私の改革の提案である。

『必要数の図書館事務員は、ただちに文部省のもろもろの部課から、図書館に転勤させねばならない。これらの部課では、その10分の9は無効果であるばかりでなく、有害でもある労働に従事している。』杉本判決にあわてふためき「判決に動揺することなく既成路線貫徹せよ」と、「無効果であるばかりでなく有害」な局長通達などを発して得々としている文部官僚がもって銘すべき文章ではないか。今年、生誕百年というレーニンの1917.11.17の手稿「ペトログラードの公衆図書館について」からの抜粋である。

#### 教育学部 3回生 西山 博

1回生の頃は学部図書室で閲覧したり、本を貸し出したりすることは皆無といってよかった。それは、学部と縁がなかったし、教養部の図書室を利用していたからである。しかし、そこでは専門書が些かであり、室内閲覧も午後4時45分まで可能だが、即日返却せねばならないし、貸出期間も7日以内という不便さを感じていた。しかし、2回生の頃から学部の図書室の本を利用し、現在に至っている。京都大学のライブラリ・システムについての詳細は知らないが、以下一応現在自分が満足していると感じた点と、要求したいと思う点を若干述べたい。

教育学部図書室の利用者にとっての長所は、図書棚の下を自由に散策(?)でき、借りたいと思う本の内容を概観できること、図書係の人懇切に調べたり探したりして下さること、貸出冊数・期間も、それぞれ6冊、21日以内と一応時間をかけて本を読める点等をあげられよう。(ただし、21日以上借りている人は、もう少し期限を伸ばして欲しいのではないか)

次に図書室および大学側に要求したい点について、建築、設備の面で閲覧室が狭いので、拡張して欲しいこと、他の面では、本をコピーしたい場合、研究室まで本を携行し、往復せ

ねばならず不便を感じているので、電子コピーを図書室内に設置して欲しいこと、また、毎月どのような新刊書が購入されたのかわからないので、学生の目に立ちやすい所にも掲示して欲しいこと、学生の不満、購入して欲しい本についても考慮して欲しいこと等があげられる。最後に、教育学部図書室が、文学部と合併され、人文科学図書館になるかも知れないらしいが、冊数の増加に対して好ましく思うが、利用システムについて、現状以下の条件になれば困るものだと杞憂する。

## 議 会

### 「新しい大学図書館像特別委員会」を 国立大学図書館協議会に設置

昨年6月に開催された国立大学図書館協議会総会において、大学紛争を契機として、従来の大学図書館のあり方を根本的に検討し直し、今後の向うべき方向を打出す必要があるという意見が、九州地区から強く主張された。この意見は全員の賛同を得、その結果「新しい大学図書館像特別委員会」が設けられることになった。

一方、国立大学協会も、図書館特別委員会を設けて、大学図書館のあり方について検討をはじめていた。そのため「新しい大学図書館像特別委員会」は、国大協の特別委員会の検討成果をふまえてスタートする形となり、本年4月末の常務理事会で委員会を決め、第1会委員会は、7月13日名古屋大学で開催された。そして、新しい大学図書館像の問題に、①理念の点から、②中・小規模の大学図書館の立場からは相互協力を中心とした面から、③機械化の点からの3点から取組むことになり、第1の問題は北大、第2の問題は山形大、第3の問題は京大がそれぞれ中心になって検討することになった。

機械化の問題については、8月6日京大で地区委員会を開いたが、それぞれの検討の成果を持ちより、8月27日東大で第2回委員会を開催、以上の3つの問題点について、検討の成果を報告、討論を行なった。ここで得られた成果を、さらにそれぞれ深め、10月1日の国立大学図書館協議会総会で報告、討論を行なうことになっている。

## ニ ュ ー ス

### ソ連科学アカデミー図書館員ブラトフ氏との懇談会

さる7月30日、ソ連図書ならびに日ソ文献交流に関する懇談会が、ソ連科学アカデミー図書館東洋部長ブラトフ氏を迎えて、本館会議室でひらかれた。

その中で同氏は、ソ連の図書館はレーニンにより抜本的な改革がなされ、蔵書2,500万冊のレーニン図書館をはじめ、大規模な図書館が数多くあり、地域センターを中心にして相互協力がよく行なわれていると語った。またさらに、ソ連では図書館職員の地位はかなり高く、目録規則も統一されたものがあるが、図書館の機械化についてはむづかしい問題もあるとのべた。

### 附属図書館で「プログラミング研修会」ひらく

現在一部の国立大学図書館では、コンピューター導入のため、要員研修や一部業務の機械化に着手しているが、本館においても門田事務官を講師として関係各掛と一部部局から計9名が参加して、8月中旬より、“フオートランによる文字情報の処理”をテーマに上記研修

会を開始した。この研修会の中では、研修と同時に京大の雑誌総合目録をコンピューターにのせる実験作業を実際に行なう予定である。本館としては将来、雑誌総合目録だけでなく、雑誌管理全般からその他の業務にまでコンピューター化が予想されるので、今後部局側の緊密な協力を得て、十分な調整の上、図書館業務のコンピューターによるシステム化を図りたいと考えている。



### 農学部・教室図書室 農芸化学雑誌閲覧室

農学部本館2階の西北寄りに2室を占め、大正12年創立以来一貫して外国雑誌充実に重点をおき現在に至った。外国雑誌165種、国内雑誌35種、蔵書冊数約13,000でバックナンバーがよく収集され、はじめより開架自由閲覧である。教室創設時は丁度第一次大戦後のドイツ不況時代でバックナンバーを安く購入しどんどん送られたと聞きおよぶ。その伝統が引継がれて第二次大戦中の欠巻購入に苦しい研究費から多大の経費が当てられ、さらに新規発行の雑誌も加えて今日に至った。現在購入誌86種、予算約330万円である。今では2室の60m<sup>2</sup>スペースに収納しきれず、本館旧書庫等4カ所に別置している。

約5年前ゼロックスを備え付けてから貸出を新着・製本済の別なく“夕方4時より翌朝10時まで”に変更した。昼間は全雑誌が揃っている。(ただし複写のために短時間の例外貸出を認める。)目録は本館のユニットカードを使用、著者・書名目録以外に

Series 物 Annual, Advance類 Symposiumの報告等を別において配列し、所在のわかりにくいものの検索に当てている。閲覧室はドアで仕切られて静寂であり、冷房もあって利用率は非常によい。また他教室・他学部・研究所からの貸出(年間1,300冊)本館複写係の貸出(年間300冊)も多く、半面こちらの教官、学生が他図書室を利用させてもらう件数も増加してきた。

関連分野の新規雑誌が急増し、限られた予算でいかに利用者の希望に応えるか、またその保管の問題特に自然科学系の雑誌の利用頻度が約10年単位で急降下する特徴を考慮に入れてスペースを生かすこと等問題があるが、職員2名で出来るだけ利用者の希望に応えたいと努力している。今後は他図書室との連携をなお一層密にしてゆかねばならないと思っている。



農芸化学雑誌閲覧室

**あとがき：**おいそがしいところを本号にご寄稿いただいた利用者のかたがたに、紙上をかりて厚くお礼を申しあげます。1学部1名の予定で依頼したのですが、夏休みなどの関係で、本号のしめきりまでに全部は集まらなかったで、もれた学部のは次号にのせます。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 7, No. 3 (通号36号) 1970年9月15日発行・編集発行人：岩猿敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表771-8111 (内線) 2220-2238